

# 「ヘルス・ニーズ」の概念について

## — 養護学と看護学の文献検索から —

### A study of the Concept of the Word of "Health Needs."

— As a Result of the Literature Search of *Yogo* Science and Nursing Science —

新谷ますみ\*・小林 央美\*\*

Masumi ARAYA\*・Hiromi KOBAYASHI\*\*

#### 要 旨

養護の対象である子どもの「ヘルス・ニーズ」の概念と特性を明らかにすることを目的として、養護学および近接領域学問である看護学の文献において、研究者らが述べている「ヘルス・ニーズ」に関する概念を整理し、考察した。その結果、養護学において、子どものヘルス・ニーズとは、養護教諭等専門家が分析した解決すべき子どもの健康問題という捉え方と、子どもの健康に関する要求、願いという捉え方の2つがあった。養護教諭が判断したのも「子どものニーズ」として扱う考えと、あくまでも養護教諭と子どもを別個の主体として捉え、それぞれのニーズとして扱う考えがあった。

キーワード：ヘルス・ニーズ 子どものニーズ 養護教諭

#### I はじめに

養護教諭の専門領域で多く用いられている用語（専門用語・学術用語）の研究は十分ではなく、同じ言葉でありながら使い方や解釈、英語表記が異なる言葉が見られるなど、専門的な用語に関する共通理解には課題がある<sup>1)</sup>。例えば、盛<sup>2)</sup>によると、「ヘルス・ニーズ」の解釈には、集団あるいは個人の「解決を必要とする健康問題（保健問題）」というとらえ方と「集団もしくは個人が提供されることを本質的に必要と判断された、保健・医療サービスの内容、質、量」とするとらえ方等があり、必ずしも統一的な見解がなされているとは言えないという。実際、筆者らも、養護活動の営みについて実践研究<sup>3)</sup>を進める中で、養護の対象である子どもの「ニーズ」や「ヘルス・ニーズ」というものについての概念が、これまでの養護学分野の研究においてははっきりと定義づけられた文献は見られなかった。

米国における17の看護理論をユニークな視点から比較・分析・統合したガートルード・トレス<sup>4)</sup>は、看護学における理論は、実践の記述、説明、予測、コン

トロールという四つの機能を果たしており、看護師が人々を援助できるように看護場面で生じる複雑な出来事の間接関係を系統的に整理してくれると述べている。つまり理論は、私たちを取り巻く世界についての考え方や見方を示すものであり、更に、その世界について考察、説明するためには、考えたりあるいは意思を伝えあったりするときに言葉を使わなければならない。しかし、言葉の意味は、自分が持っている知識や仮定に基づいていることが多く、人によってもそれぞれ異なっている。故に、言葉を使う場合には、その言葉が持つ真の意味を理解しておく必要があるという。このことから、養護学の構築を目指した実践研究においては、使用する言葉の概念や定義を明確にした上で、研究していく必要がある。

#### II 研究目的

近接領域の看護学の理論家は、看護における人間のニーズについて述べ、定義づけている。それらの看護学領域におけるニーズの概念を参照し比較しつつ、養護学研究の中では、どのように定義づけられ、どのよ

\* 弘前市立第一中学校  
Hirosaki Daiichi Junior High School  
\*\* 弘前大学教育学部教育保健講座  
Faculty of Education, Hirosaki University

うな特性をもっていると表現されているかについて整理し、分析することで、養護の対象である子どもの「ニーズ」、「ヘルス・ニーズ」の概念を明らかにすることを目的とした。

III 研究方法

看護学理論において、ガートルード・トレス、ヘンダーソンらの著作から「ニード (ニーズ)」「ヘルス・ニーズ」についての記述と日本の養護学の研究者6名が述べている「児童・生徒のニーズ」「ヘルス・ニーズ」「ニーズ」等の概念を整理し、考察した。尚、文献ではそれぞれの筆者により子どもの「ニーズ」や「ヘルス・ニーズ」の表記が混在したが、文献の表記に従った。

IV 結果と考察

1. 看護学の分野におけるニーズの概念

1) 看護学関連の辞書によるニーズの意味

看護学大辞典 (第6版)<sup>5)</sup>によると、「ニーズ」とは、一個人がある状況に置かれた場合、なんらかの体系的不均衡状態 (不足あるいは過剰)があると引き起こされる緊張状態であり、自身を安楽かつ有能に維持するための欲求である。この欲求の存在により動因・動機が生じ、人間の行動が起こされる。

「ヘルス・ニーズ」とは、「その個人や集団にとって解決を要する健康問題」という意味合いが強いとされている。個人や集団が単に意識的に要求している事実 (顕在化した需要)ではなく、専門家による判断、客観的に求められている事実を指していた。(表1)

2) 看護学理論家によるニーズのとらえ方

表1 「ニード」「ヘルス・ニード」の意味

	ニーズ (needs)	ヘルス・ニード (health needs)
医学書院「看護大辞典」 <sup>6)</sup>	対象者の現状から客観的に存在する、対象者が必要としているもの。	なし
メヂカルフレンド社 <sup>5)</sup> 「看護学大辞典」第6版	人間の行動を説明した心理学者レビン K.Levin の使用した概念。一個人がある状況に置かれた場合、なんらかの体系的不均衡状態 (不足あるいは過剰)があると、その中で自身を安楽かつ有能に維持するための欲求 need と呼ばれる緊張状態が引き起こされる。欲求の存在により動因・動機が生じ、人間の行動が起こされると説明されている。基本的欲求の分類には様々なものがあるが、一般的に呼吸、飲食、排泄、安楽、安全、休息、睡眠、性などの一次的・生理的欲求と、愛情、美、承認、自我実現などの二次的・心理的欲求、に分けることが多い。	一般にWHO、米国などで用いられる場合、「その個人や集団にとって解決を要する健康問題」といった意味合いが強い。個人や集団が単に意識的に要求している事実 (顕在化した需要)ではなく、むしろ、専門家による判断、客観的に求められている事実をいう。健康上の要求 want が積極的な需要 demand に転化し、さらにそれに対して何を満たすべきかを専門家が決定したとき初めて、それをヘルス・ニーズと呼ぶ。したがってヘルス・ニーズの判定には専門的な知識が不可欠であり、また場合によっては満たすべきヘルス・ニーズが対象となる個人や集団の意思に反することもありうる。

表2 主な心理学・看護学理論家における「ニード」の概念<sup>4)</sup>

人物	概念
ヘンリー・マレー	供給または緩和を必要とする状態。行動に影響する有機体内部の仮説的な力 (動因、ニード、性癖) それらの行動は、身体内部から生じる体内発生性か、または心から生じ、活動の開始と中止を含む心理起因性のいずれかである。
エイブラハム・マズロー	人間は、その行動を動機付けるニード、欲求、または動因を持つが、それらは基本的には階層をなすものである。『欲求階層説』
バージニア・ヘンダーソン	人間がもつ14の基本的ニード (看護ケアの構成要素となるもの) ⑨呼吸 ②食事 ③排泄 ④運動 ⑤休息と睡眠 ⑥適切な衣服 ⑦体温 ⑧身体の清潔と皮膚の保護 ⑨安全な環境 ⑩コミュニケーション ⑪信仰 ⑫仕事 ⑬遊び ⑭学習
フェイ・グレン・アブデラ	患者は身体的・生物的・社会心理的ニードを持つ。
アイダ・ジーン・オーランド	もし充足できれば、患者の当面の苦しみを緩和ないし軽減できる、あるいは当面の適応感や安寧感を高めることができるような患者の欲求。
アーネスティン・ウィーデンバック	個人が、そのおかれた状況の中で自らを安楽に、または有能に維持するために必要とするもの。援助へのニード: 個人が必要としたり欲したりする手段または行為であり、その人がおかれている状況の中で、自分に要請されることに対処できる能力を回復したり拡大したりする可能性をもつ手段または行為。
ドロセア・E・オレム	人間は物質の摂取のニード、および健康過程を支えるような生活条件をつくり出し維持するニードを共通に持っている。
ルシル・キンレイ	オレムの定義を用い、ニードを認識し伝達するクライアントの能力に焦点をあてる。

ニーズについて言及している主な看護理論家を表2にまとめた。

ガートルード・トレス<sup>4)</sup>によると、看護は何年にもわたり、環境、ニード、システム、相互作用という四つの主要なテーマを発展させてきた。1950年代半ばから60年代半ばにかけては特にニードが強調され、アブデラは問題をニードという意味で用い、ホールは安楽を与えることに関連付け、オレムはセルフケアに対する個人のニードについて述べている。看護師（婦）はクライアントのニードを明らかにして、そのニードを満たす、あるいはクライアントが自分のニードを自分で解決（満たすことが）できるように援助するということであるとされる。

これらの理論家は、看護とニードを深く関連付けているため、ガートルード・トレスは、「ニード指向理論」と名付けている。

更に、ニード指向理論として分類した3人の理論家について、ヘンダーソンは患者の14のニードに焦点をあて、アブデラは患者のニードを満たすために確認しなければならない21の看護問題に焦点をあて、オーランドはニードの特定化はとくに行わずに当面のニードに焦点をあてている。これら3人の共通点は、ニードに焦点をあてていることであり、相違点は挙げられたニードが異なることである。

特に、ヘンダーソン<sup>7)</sup>は、ニーズの特性として以下のように述べている。「ある種の動機付けはある人には強く働きかけるが別のある人にはそれほどでないこと、また同じ人間のなかでも欲求（ニード）は、特により強くなったり弱くなったりする」ものであるとしている。人間には共通の欲求があると知ることが重要であるが、それらの欲求がふたつとして同じものがない無限に多様な生活様式によって満たされる。そのような意味において、看護する者は一人一人が求めることすべてを完全には理解できないし、その人の充足感に合致するように要求を満たすこともできない。看護を受けるその人にとっての意味における健康、その人にとっての意味における病気からの回復に資するようにその人が行動するのを助けることであるとしている。

## 2. 養護学の研究者らによるニーズの概念

養護学に関する文献を著し、その中で子どもの「ニーズ」や「ヘルス・ニーズ」という言葉を使用している研究者6名（小倉学、杉浦守邦、森田光子、竹田由美子、中桐佐智子、盛昭子 敬称略）について、

述べられた概念をまとめた。（表3）

子どもが「薬をください」という場合、「薬がほしい」というのは、杉浦<sup>8)</sup>によると「要請」であって、「ニーズ」ではない。「薬をあげて」子どもの「ニーズ」を満たしたと思っても、子どもの真のニーズは満たされず、不満が残るといことがある。「～が欲しい」「休みたい」といった主観的な子どもの訴えの底に、子どもの真のニーズがあると述べた。

盛<sup>9)</sup>は、子どもの「ニーズ」と養護教諭の専門的な立場からのニーズは、必ずしも一致しないと述べ、子どもの「ニーズ」をありのままに受け止めながらも、一致しない場面においては、思いのやり取り（相互行為）を進め、分かり合い、共通化しようとする行為（ニーズの共通化）の大切さを指摘した。

このように、子どもの「ニーズ」については、研究者独自の捉え方があり、それは、研究者の「養護」の捉え方に依拠している。例えば盛は、養護教諭の子どもへの対応は、養護教諭の考えを一方向的に子どもに押し付け、やらせるのではなく、子どもの人権を尊重した関わり方であり、養護活動が教育的な営みであるという立場から、子どもの主観的な「ニーズ」、養護教諭の客観的な「ニーズ」というふうに、両者を独立した主体としてはっきりと分けて捉えている点において独創的である。

また、今野<sup>10)</sup>によると、子どもの発達段階から入室理由が異なることから、発達段階に応じて、保健室の機能に対するニーズが変化する。子どもの「ニーズ」は、発達段階に応じて「自己実現」へと向かっていると述べていた。

### 1) 「ニーズ」の概念と特性

「ニーズ」の概念は、養護学及び看護学において、人間の内にある希求と捉えている点において共通していた。その特性については、それぞれ違いが見られたが、ヘンダーソンのとらえているニーズの特性は、学校における子どものニーズにも当てはまる特性であると思われた。保健室に来室する子どもの「ニーズ」は、森田ら実践研究から得られた分類はできるものの、一人ひとり異なり、その子どもにとっての意味もちがう。更には子どもの思考や感情は対応や環境によって変化するため、同じ子どもの同じ「ニーズ」でも、その度合いが強くなったり弱くなったりすることもある。また、森田らの養護実践研究で明らかになっていることは、一人の子どもの「ニーズ」は、一つではなく複合していること、また子ども自身からはっきり

表3 養護学関連の文献における子どもの「ニーズ」「ヘルス・ニーズ」の概念や特性

研究者名	表 記	概念や特性
小倉学 <sup>11)</sup>	児童生徒のニード	ヘルス・ニード…解決を必要とする保健問題。 養護教諭が専門的な立場から解決が必要と判断したことを教師あるいは児童生徒のニード (felt need) として感じ取ってもらう。しばしば主観的なレベルにとどまっている。
杉浦守邦 <sup>8)</sup>	ヘルス・ニーズ	解決を求められている児童生徒がもつ健康問題。健康状態を、理想的な健康状態、高次の健康状態、低次の健康状態、不健康状態 (疾病状態) と考えるとき、これに合わせて現在抱えている健康問題 (ヘルス・ニーズ) が軽くて小さいものから、比較的重いもの、さらに極めて重大かつ深刻なものとなる。
森田光子ら <sup>12)</sup>	児童生徒ニーズ	児童生徒の求めと、養護教諭が、その児童・生徒が何を求めているのかを判断したもの。言葉によって「〇〇〇をしてほしい」と表現したものばかりではなく、語調や表情や態度などから、養護教諭が汲み取ったものもかなりある。以下の4つに分類している。必ずしも単独に存在するものばかりではなく、むしろ心と体と知識などが複雑に絡み合い、多くのニーズを有するものの方が多い。(複合ニーズ) 「処置ニーズ」…内科的・外科的主訴をもち、それに対する応急処置を求めるもの。 「情緒ニーズ」…不安・緊張・不満等さまざまな感情があって、情緒の安定を求めるもの。 「知識ニーズ」…心身の健康問題や学校生活、進路その他問題解決に必要な知識を求めるもの。 「生活調整ニーズ」…現実は今、当面している問題を解決するため、直接的な援助を求めるもの。
森田光子 <sup>13)</sup>	ニーズ	なんとなく来室する子どものニーズは、(1) 身体的な苦痛の除去、緩和。(2) 不安の除去、心理的なくつろぎ、安定。(3) 問題解決 (意識されてない場合が多い。考え方や知識情報を得る) の3つに要約される。ニーズとは「子どもが求めていること」だけではない。養護教諭は子どものサインを観察し、問診や検診によってニーズを判断することから、子どもが訴え、求めていることと、養護教諭が必要であると考えられるものの両方が含まれている。
竹田由美子 <sup>14)</sup>	子どものヘルスニーズ	子どもの健康上の問題や悩み、適応 (安寧) に関する欲求。保健室へ身体的な症状やさまざまな訴えで来室した子どもの言葉、表情、態度などから、養護教諭が本人の意識の有無に関わらず必要と判断し、それに対応して充足させようとする意図・意志を含んだもの。大きく4つに分類され (森田の分類と同じ)、相互に絡み合い、複数のニーズとなって訴えられることがほとんどである。
中桐佐智子 <sup>15)</sup>	ヘルス・ニーズ	健康問題。児童生徒の健康実態を把握することで判断されるもの。養護教諭は対象者のアセスメントによって、対象者が自分のニーズ (困難・不快) を明らかにするのを助ける。ヘルス・ニーズを抱えている対象者は、多くの場合何らかの健康上のニーズを持って保健室にやってきて、養護教諭に訴える。
盛昭子 <sup>9)</sup>	子どもの主観的なニーズ	「主観的」である。悩み、問題に思っていることや願い。子どもが求める基本的な対応「すぐ対応してほしい」「話をよく聞いてほしい」「きちんと処置をしてほしい」などがあたる。
	ヘルス・ニーズ	「目の前の子にとって今 (さらには今後) 最も何が必要か」といった「提供されることを本質的に必要とされる支援の内容、質 (緊急度、重症度)、量 (支援期間)」 判断の主体は、一般的には養護教諭となるが、必要によっては他教師や保護者、専門機関の医師あるいはカウンセラー等との連携のもとでもなされる。さらに、養護教諭が「養護」をどうとらえるのか、養護活動の目標をどこにおいて進めるのかによってとらえるヘルス・ニーズは変わる。

りと表現されにくい、潜在的なニーズを養護教諭が汲み取る場合も多い。看護学分野で明らかにされている基本的で人間に共通したニーズであっても、子どもは訴えることができないこともある。養護教諭は信頼関係を結び、工夫した対応で子どものニーズを表出させたり、汲み取ったりしていることがうかがわれる。

## 2) 「ヘルス・ニーズ」の概念と特性

「ヘルス・ニーズ」は、養護学研究者らにおいて概ね、養護教諭等専門家により判断された健康問題という捉え方が一般的であった。処置の希求である「処置ニーズ」のような捉えられ方ではない。しかし、竹田のいう「子どものヘルス・ニーズ」については、子どもの「ニーズ」の概念の他に、森田の「養護ニーズ」、盛の「養護教諭の専門的な立場からのニーズ」を含んだ概念として扱われていた。学校現場での対応は、ど

こまでが子どものニーズで、どこからが養護教諭のニーズなのか線引きできない状態になりながら、対応が進むことは経験される。子どものニーズが子ども自身無自覚であり、意識下に潜在していて、なかなか表出しない場合も多くあり、養護教諭が予測し、問いかけ、気づかせる。子どものニーズを認識し、判断する主体は養護教諭であり、子どもと養護教諭の思いが混然とした中で、対応が進んでいるためと推察された。

## 3. ニーズを捉え、判断する側のあり方

ニーズ及びヘルス・ニーズの概念と特性を述べる上で付け加えるべき重要なことは、ニーズやヘルス・ニーズの内容は捉える側のあり方によって異なるということである。

小林<sup>16)</sup>は、学校の保健室に来室した児童生徒の様子から、養護教諭が必要だと捉えるニーズ判断は、養

護教諭自身の子ども観、健康観、教育観等により導き出されるものであり、目の前の児童生徒をどのように捉えるかによって、課題（ヘルス・ニーズ）は見過ごされることもあるという。同様に看護学においても、薄井<sup>17)</sup>は、「看護は人間が人間を見つめるところから出発するものであるから、見つめる人間がどのような人間であるかが厳しく問われる」と述べている。現象の中に潜在するニーズ及びヘルス・ニーズをどのように捉えるかによって、養護や看護の内実が決定づけられるとすれば、捉える側のあり方は極めて重要なことといえる。

## V まとめ

養護の対象である子どもの「ヘルス・ニーズ」の概念と特性を明らかにすることを目的として、養護学および近接領域学問である看護学の文献において、理論家が述べている「ヘルス・ニーズ」に関する概念を分析した結果、

- ・養護学においては、子どものヘルス・ニーズとは、養護教諭等専門家が分析した子どもの健康課題という視点と、子どもの健康に関する要求、願いと捉える視点の2つがあった。
- ・養護教諭が判断したのも子どもの「ニーズ」として扱う考えと、あくまでも養護教諭と子どもを別の主体として捉え、それぞれの「ニーズ」として扱う考えがあった。

## VI おわりに

すでに明らかにされている科学的知見の上に、看護学としての独自の知識体系を構築することに貢献してきた理論家の視点は、普遍的なものを含んでおり、養護教諭の理論である養護学の構築においても重要な示唆を与えるものがある。養護実践は、曖昧かつ複雑な面を持ち、実践研究として他者に向けて表現し、理論化することが難しいと感じている。2012年には、日本養護教諭教育学会の養護教諭の専門領域に関する用語の解説集第二版が刊行され、養護学に関わる重要な32語の定義と解説がなされた。現職養護教諭である筆頭執筆者は、自分の養護実践を考察し、他者に説明する際に、この解説がとても参考になった。今後も、養護

教諭はもちろん、多くの人々に養護教諭の養護実践の教育的意義を理解してもらい、共通した認識をもつことができるように、養護実践に内在する様々な概念を整理し、「養護学における専門領域の用語」として定義し、蓄積していくことはとても重要である。

## 文献

- 1) 後藤ひとみ、三木とみ子、養護教諭の専門領域に関する用語の解説集<第二版> 刊行のことは、日本養護教諭教育学会、2012
- 2) 養護教諭実践講座刊行会、盛昭子他、児童・生徒のヘルス・ニーズとヘルス・ニーズのとらえ方、84、CARA 養護教諭実践講座、第7巻学校救急処置活動の展開、ニチブン、1990
- 3) 新谷ますみ、小林央美、養護活動における子どもと養護教諭のニーズの共通化の営み、日本養護教諭教育学会、第23回学術集会抄録集、80-81、2015
- 4) ガードルード・トレス、横尾京子、田村やよひ、高田早苗監訳 :THEORETICAL FOUNDATIONS OF NURSING 看護理論と看護過程、医学書院、52-53、1992
- 5) 看護学大辞典第6版、メヂカルフレンド社
- 6) 看護大辞典、医学書院
- 7) Virginia A. Henderson、Basic Principles of Nursing Care 看護の基本となるもの、湯楨ます、小玉香津子訳、日本看護協会出版会、17-18、1995
- 8) 杉浦守邦、養護教諭講座1養護概説、東山書房18-19、1999
- 9) 盛昭子他、養護学概論第4版、東山書房、48-49、2004
- 10) 今野洋子、養護教諭および保健室に関する研究(1) —大学生の持つ養護教諭と保健室の印象から—、北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要「生涯学習研究と実践」第8号、255、2005
- 11) 小倉学、養護教諭その専門性と機能、東山書房、223-224、1997
- 12) 森田光子、今井洋子、西村紀美代他、日常的に行う相談活動の実際、東山書房、77-83、1987
- 13) 森田光子、前掲2)、285-290
- 14) 大谷尚子、森田光子、井出元美奈子他、養護教諭の行う健康相談第12版、東山書房
- 15) 中桐佐智子、前掲9)、82-84
- 16) 大谷尚子、中桐佐智子、小林央美他、新養護学概論、東山書房、59-60、2009
- 17) 薄井坦子、改訂版看護学原論広義、20、1999、現代社  
(2016. 8. 8 受理)